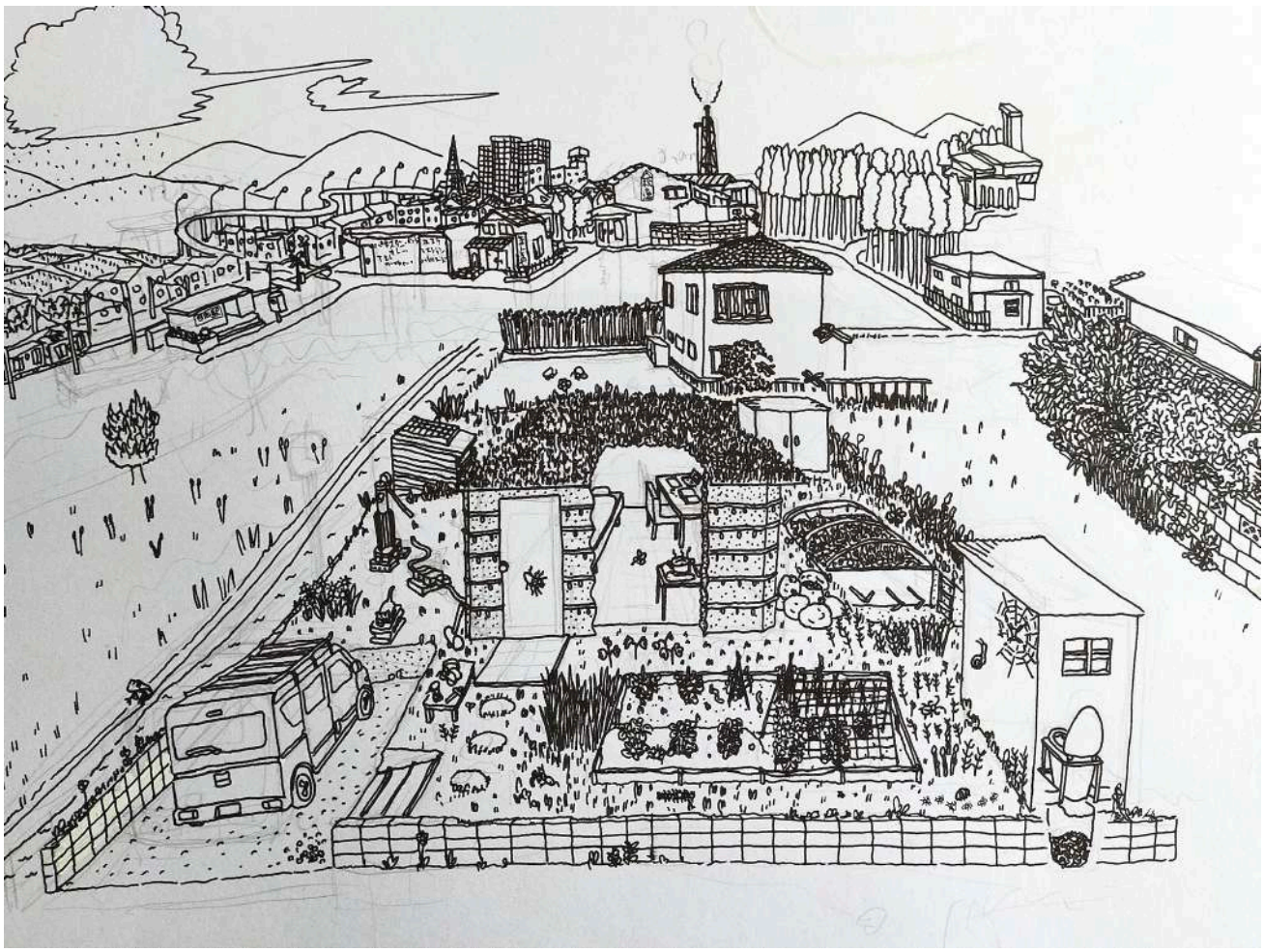
土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日



はじめに

人に説明するための、勉強堂のコンセプトドローイングのようなものを描いた。敷地内の植物や虫、動物、隣家など周辺の環境に影響を受け、あるいは影響を与えながらそこにあるイメージ。中央にあるのが勉強堂「本堂」で、すぐ上に滝口さんの家、その上に見える煙突のある建物が松の湯で、その右がクリーンセンター入浴施設。左には日向駅の駅舎と、そこから都心まで続く高速道路もある。右に見切れているのは植物に覆われている空き家。

本報告は、９月に行った左下の駐車場工事と、本堂の基礎用の穴を掘る土木工事に関するものである。

駐車場工事というのは、現状だと敷地が道路面よりも50cmほど高くなっており、車が入れないという状況を改善するため、道路に合わせたレベルまで穴を掘り、土留めをして、境界になっているブロック塀を壊す工事のことである。最初はこれも「虫たちが逃げ惑う姿を目に刻みつけながら工事をするのが、せめてもの礼儀だ」などの理由から、シャベルを使って人力でやろうとしていたのだが、すこし冷静に考えれば縦４m×横２.５m×深さ５０cmの穴を人力で掘るのは無茶（というかそれだけで一週間くらいかかりそうでやだ）なので、ユンボをレンタルすることにした（ユンボというのは、工事現場で一番よく見る、大きなバケットを油圧ポンプで動かすキャタピラ駆動のアレである）。

着工にあたり、事前に「千葉レンタル」と「アクティオ」という建設重機のリース業者に、それぞれユンボのレンタル料金を問い合わせていた。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

●千葉レンタル：1.7トンクラスのユンボで１日5000円程度。プラス保証料などが1000円くらい。回送費は「12000円くらいみてもらえれば」とのこと。

●アクティオ：回送はやってない。

ユンボのレンタル料が意外と安くて助かったが、回送料金は高額（「回送」というのは借りたユンボをダンプで現場まで運んでもらい、返却時には現場まで引き取りに来てもらうこと）なので、土木工事はなるべく一度で終わらせたい。

9月15日、「千葉レンタル株式会社」に電話をかけ、1.7トンクラスのユンボの回送レンタルを依頼した。千葉レンタルは問い合わせの時からおどろくほど親切で、工務店などの業者でもなんでもない村上という個人（しかも素人）へのレンタルであるにもかかわらず、横柄な態度をいっさい見せずに対応してくれた。

電話口で「爪はどうなさいますか？　タテヅメかヒラヅメか」と聞かれたのだが、何を言っているのかわからず、「すいません、どう違うんですか？」と聞き返したら「どのような用途でお使いになられますか」とこちらの事情を尋ねてくれ、「道路面から50センチくらい上がってる敷地を一部掘って、道路面と同じレベルにしたい」と説明すると「用途に合わせてこちらで準備しておきます」と答えてくれた。

公式ウェブサイトによると、千葉レンタルの社是は「敬客愛品」。「創業以来35年間、地元密着型の建機レンタル業を営んでまいりました」とのことである。推せる。

９月１８日（工事一日目）

「UNMANNED　無人駅の芸術祭」という静岡県の川根本町で行われている芸術祭での制作以来、数年ぶりにユンボが動かせるのが楽しみで、意気揚々と現地へ向かったのだが、例によって現場は絶望的な状況だった。

まず草がとんでもないことになっていた。3ヶ月前に丸裸にしたはずの土地で、植物たちは既に胸元まで伸びていて、もうミッチミチに詰まっていた。発電所も井戸もなにも見えない、オールグリーンな状態である。陽を受けた葉っぱたちが生き生きと輝いている。

とはいえこの光景も見慣れていたので、地面に置いたままにしていたコンクリートブロックにつまずきながら、草をかき分けて発電所まで行き、いつも通り草刈機のバッテリーを充電しようとした。そこで初めて、問題が発生していることに気がついた。ソーラーパネルとバッテリーを結ぶ、太陽光発電の要である「チャージコントローラー」の電源がついていなかった。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

ソーラーパネルにつながっている線を抜いたり挿したり、リセットボタンを押しても、うんともすんとも言わない。これでは草刈機の充電ができない。あの生き生きと輝いている植物たちを人力で刈るハメになってしまう。

私は慌てた。慌てすぎて、いますぐにAmazonで同じチャージコントローラー（長いので以下CCと呼ぶ）を注文すれば明日にはコンビニで受け取ることができる、と先走ったことを考えてしまい、ポチってしまった。そして、のちにこの決断を後悔することになる。

太陽光発電が使えない以上、他の方法で草刈機を充電するしかない。そして思いついたのが、裏の滝口さんに借りる、という選択肢だった。

さっそく滝口さんちの玄関先に周り、緊張しつつインターフォンを押すと、すぐに「はい〜」と奥さんが応えた。

「裏で作業してる村上ですけど」

３ヶ月ぶりにもかかわらず奥さんは私のことを覚えてくれていた。

手土産もなにも用意していないことを後悔したがそれはもうしょうがない。必死で事情を説明すると、奥さんは満面の笑顔で、「いいですよ」も何も言わず、さも助けることが当然であるかのように「ああ、たしかここに」と呟きながら、家の外壁に備え付けられたコンセントまで案内してくれた。

「ここと……ここにもありますから。使えなかったら言ってください」

案内してくれた３箇所のなかで一番発電所に近いコンセントにドラムコードを挿す。充電器を繋げると、ピーという電子音とともに充電が開始された。電子音がありがたいものに聞こえたのは初めてだった。

「電源が壊れたんですか？」

「ソーラーパネルとバッテリーのあいだにチャージコントローラーっていう機械があるんですが、それが壊れちゃったみたいです」

（のちに判明したことだが、この説明は間違っていた）

「そうですか。まあ変だったら言ってください。ここにもありますから、3箇所。暑いなかなので、お気をつけて」

奥さんは私の体調まで心配してくれた。裏が滝口さんで本当によかった。次は手土産を持ってお礼をしに伺おうと胸に誓った。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

＜とつぜんのコラムコーナー＞

草刈りをするさい、敷地境界に埋め込まれているコンクリートブロックから飛び出した鉄筋やら、前回地面に置きっぱなしにしていた単管パイプや塩ビパイプ、ポリ袋に入った落ち葉などが草の中に隠れていて、それが草刈機にぶつかると刃が欠けたり、ポリ袋が千切れて飛び散ったりしてしまうので、非常にやりにくい。なにか障害物がないかと目を光らせながら、葉と葉のあいだにちらりと鼠色の塩ビパイプが見えたら草刈機を止め、パイプを草むらからひっこぬいて脇に放り投げ、草刈りを再開する、ということを何度も繰り返す。鉄筋はさっさとグラインダで全部切るなり、資材はどこかにまとめて、次の作業の時に邪魔にならないようにすべきだと、草刈りをするたびに思うのだが、もう４回も５回も草刈りを繰り返しているけど、私はそれをぜんぜん改善しない。端的に効率が悪い。

そもそも、草が生えないように日除けシートで地面を覆えばいいではないか、とも思う。それで作業が楽になるのはわかっている。でも一方で、ここに来るたびに植物の成長に驚き、草刈りから始めるという、ある種の原点回帰を繰り返すのもそれはそれで大事というか、シートで地面を覆ってしまったらそれは「自分は現場にいないのにやたらと管理したがる嫌な上司」みたいな気がする。その場にいるときはいいが、そこにいない人間が、場を管理する権利などあるんだろうか。

除草剤を撒けばいいと人に言われたりもするけれど、それには抵抗がある。私には一生できないだろう。ホームセンターに行くとモンサントの除草剤がずらりと山積みにされていたりして、ということはみんなそれを使っているのだと思うけれど、それをやってしまうと環境に対して取り返しのつかない影響を与えてしまいそうで、私の手を離れてしまう行為だと思う。企業の実験をこの目で見たわけではないので、どういう仕組みで植物が枯れるのかもよくわからないうえ、「植物が枯れる」ということは、そこに住んでいる蜘蛛やバッタやカマキリやミツバチたちにも甚大な影響があるはずで（つまり除草剤で「枯れる」のは植物だけではない）、バッタがいなくなったらバッタが天敵の虫が増えて生態系にも影響が出て、蜂がいなくなったら蜂蜜もとれにくくなって、蜂蜜が大好きな私にもダメージが回ってくる（「私にダメージが回ってくるから嫌だ」というよりも、単に嫌だから使っていないだけなのだが）。

自分が所有している小さな面積だけなら問題ないだろうと思って、みんなは使うのかもしれないけど、全員がそう考えている可能性を考えるとおそろしい。

草刈りがひと段落したころ、演劇カンパニー「新聞家」主宰で友人の村社くん夫妻が見学に来てくれた。敷地前の道路でタープを開き、日が沈むにつれて移動していく日陰を追いかけながら三人で雑談。車内に数時間放置したせいでぬるくなった麦茶を紙コップに出して、緑（といっても、空き地の草たちだが）を眺めながら、ときどき虫の声や風が抜けるのを感じながら、ぽつぽつとおしゃべり。こういう時間がとれるのも、勉強堂のよいところだと思った。

勉強堂に来るといつも作業に追われてしまい、目まぐるしく一日が終わっていくので、日向という土地が本来とても静かな場所であり、流れている時間はおだやかなものなのだと、初めて気がつくことができたかもしれない。そして、一人でいるときはただうんざりするだけの、どちらかといえば敵対する立場にあると思っていた植物たちが、（都心ではあまり目にしないほど大量に生えているということもあるが）二人の客の前ではなんだか誇らしげだった。

村社くんが「ここだと虫が気にならない。街だと虫がいっぴき飛んでいただけでウワッとなるのに」と言っていたのが印象的である。私も同じことを来るたびに思う。ここで目にするゴキブリ（羽のない小さなやつが特にたくさんいる）は、まったく嫌な存在ではなく、ただの隣人という感じがする。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

二人が帰ったあと草刈りを再開。夕方までに一通り終え、ついでにブロックから飛び出している鉄筋をグラインダで（ついに）すべて切り←、荷物を動かして明日のユンボ作業に備えてから滝口さんにお礼を言いに行った。

「なおりましたか？」

「いや、なおらないんですけど、でも明日部品が届くので、大丈夫だと思います。今日は助かりました」

「いえいえ、またなにかご入用なら」と奥さん。愛想良くにこにこと。いい人だ。

クリーンセンター入浴施設

18時。全身泥みたいな状態で、予約していたクリーンセンター入浴施設へ。受付で体温を測られる。久々に「検温」を受けた。このところ身の回りではコロナ禍がなんとなく終息した雰囲気になっていたため、新鮮な気持ちになった。公共施設だからという理由もあるだろうけど、現代社会ではもうあまり見られなくなった、失われた伝統を律儀に守っている人たち、という感じすらする。そういえば都心よりも地方の方がマスク着用率も高いし、皆がまだ気をつけている印象がある。感染したら噂が広まりやすいから、なのか。

風呂の中は混んでいた。すでに六人くらい入っていて、脱衣所にも一人いた。タオル以外の、入浴に必要なもの（石鹸など）をぜんぶ忘れたことに気がつき、コンビニまで戻って買おうかとも思ったけど、昔琵琶湖のほとりの、なんというか「自然派志向」の人たちが住んでいる家に泊まらせてもらったとき「私たちはシャンプーとか使わないんですよ。お湯で流すだけ。福山雅治も湯シャンですよ」と言われたことをふいに思い出し、自分も福山みたいにお湯で頭を流せばいいかとりあえず、と思い直し、そのまま突入した。

露天風呂には例によって刺青のあの人がいて、知らないおじさんと話していた。

「荷物軽かったら、最近はLCCが安いですよ」

知らないおじさんの方の声が耳に入ってくる。刺青の人は「そうですか」と相槌をうちながら、以前松の湯で出会った「ちんこかゆい男（報告書第9号参照）」が出していたスポンジの音にそっくりな音を出しながら、顔を磨いている。

「五万円くらいですよ。往復ね。」

「はあ、そうですか」

刺青の人のほうが下の立場であるかのような言葉づかい。

「僕なんかはゴルフバッグもっていくから、追加料金で１、２万円払うんですけど。30kgまで預けられるから。普通の荷物は20kgまでなんですけど、でも僕は20kgじゃちょっとね」

「最近は、ゴルフバッグ持ってる人いないですよ。8月にもセブ行ってきたけど」

「タイは多いですよ。特に冬、北海道の人なんか、雪でできないから」

「そうですか」

ゴルフをしにわざわざ海外に行く、という文化があることを知らなかったので、話の続きが気になるっちゃ気になるのだが、すでにのぼせそうだったので諦めて風呂から出た。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

まんまや

その後、お決まりの「まんまや」で晩御飯。「サイコロステーキ定食」に添えられていた刻みわさびのタレがすごく美味しかった、と店のおばちゃんに伝えたら、あんまり辛くないしね、と。そうそう、ぜんぜん辛くなかったです、美味しかったです。

おばちゃんが思い出せるように、前に「素敵な帽子」と褒めてくれた帽子をあえて被ったまま店に入ったのだけど、そのおかげかどうなのか、帰り際に「いつもすいません」と言って見送ってくれた。この帽子を被るとき、たまにこのおばちゃんの「素敵な帽子」という言葉を思い出す。親しく話せるほど常連でもないけれど、この帽子にはおばちゃんの言霊のようなものが宿ってしまっている。それを被れることを嬉しく思う。

まんまやから帰って、原稿の仕事をしているうちに22時になり、寝袋を敷いて車内で横になる。最初は暑くて、これでは眠れないかも知れないと思ったけど、モバイルバッテリーで動かせる扇風機をしばらくまわしているうちに体が冷え、一度体が冷えたらもう暑さを感じなくなった。快適な気候だと思った。蚊帳を吊り、車の窓をあけて寝袋で寝る。360度、虫の声（蚊の羽音ふくむ）に包まれていた。

９月１９日（工事二日目）

６時。起床した時は涼しくて、もう完全に秋になったなと思っていたのに、7時過ぎくらいからぐんぐん気温が上がり始める。朝のうちは秋だが、昼間はまだ夏で、ときどき風が吹くと秋を感じるという具合。9月は夏と秋が一日のなかでせめぎ合うらしい。

８時前からしばらく、コンポストトイレが作ってくれている影にキャンプチェアを置いて昨日の日記を書く。手元の邪魔をしそうな周囲の猫じゃらしだけを引っこ抜いて、まだ夜だと勘違いしている虫たちの声に包まれている。アゲハ蝶やシオカラトンボが飛んでいく。ときどきハエも。お日さまが当たっている背中の上部だけ暑いけど、それ以外の部位は涼しい。体の一部だけ夏だった。

コンポストトイレも使い始めた。心配だった匂いは気にならないレベルどころか、まったく何も感じない。匂いゼロだった。私の鼻が悪いせいもあるかもしれないので、他の人の意見も聞いていく必要はあるが。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

ユンボ到着

１１時ごろ、「千葉レンタル」の回送担当者とセブンイレブンで待ち合わせ。ユンボは２トントラックに載って登場。興奮した。担当者は私よりも10歳は若そうな、感じのよい兄ちゃんで、現場を見て「ああ、この上に載せたいんすね、いけますよ」と、ブリッジも使わずに敷地の上にユンボを載せてくれた。

差し出された書類に「引取確認」のサインをしているとき、兄ちゃんが「なにかつくるんすか？」と聞いてきた。なんと答えたものか迷ってしまって、「小屋みたいなものを……」ともごもごしていたら彼は

「小屋すか」

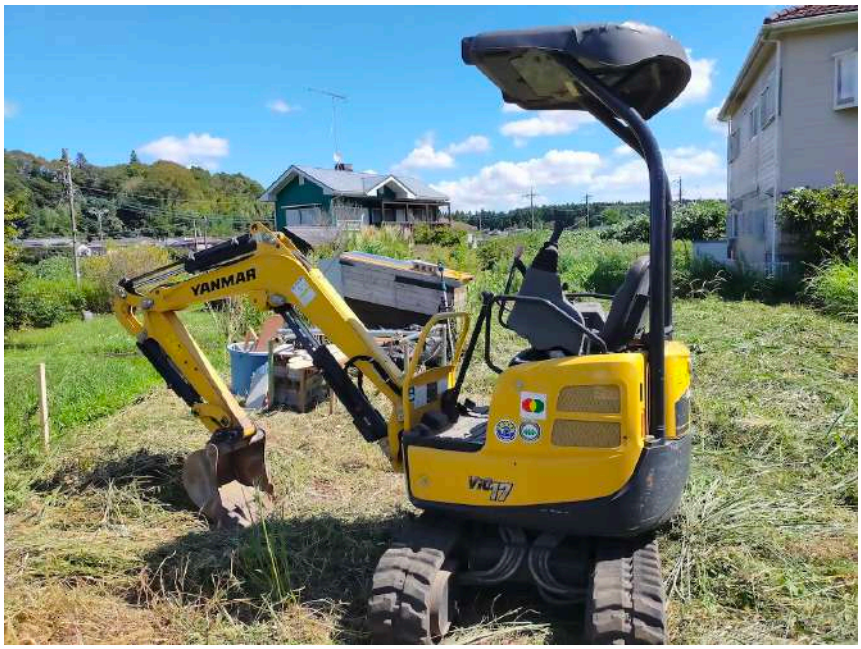
と言った。こやすか、と一息で言い切った。

「（借りるのは）三日ですか？」

「その予定です」

「じゃあ、また引取り来るんで」

青いツナギが似合う兄ちゃんだった。



←ついに投入されたユンボ

YANMAR ViO17
（後方超小旋回ミニショベル）

機械質量：1660（kg）

エンジン：立形水冷3気筒ディーゼル

バケット容量：0.04(m3)

レンタル単価：5,000円（１日）

回送料金：10,500円（片道）

レンタル代金合計：43,175円（３日間。基本料、補償料含）

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

乗り込んで、すこし動かしてみる。
ダンゴムシが逃げ回っているのが、操縦席からでも目を凝らすと見える。

←中央付近に見える小さな丸い粒が、丸まったダンゴムシである

やはりこれはゴジラというか、乗り込む者を巨大怪獣にしてしまうらしい。「すごーく目を凝らせば、操縦席からでもぎりぎりダンゴムシとかハサミムシ程度は見分けられるな」と思っていたのだが、ユンボを降りて地面に寄ってみると、上からは全く見えなかった蟻とか細長い甲虫とかがウヨウヨいて、みな気が狂ったよう逃げ回っていたので、ショックを受けてしまった。私は何も見えていなかったのである。

二本のレバーを10cmほど前に倒すだけで、このリトルゴジラはブレードで前方の障害物をすべて薙ぎ倒しながら前進を始める。地表の植物たちは根こそぎ破壊され、あとには露出した茶色い土とキャタピラの跡だけが残る。

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

操作に慣れるために敷地内を動き回り、ふと気がつけば現場は砂漠みたいになっていた。自分はとんでもないことをしてしまったのではないかという（わりとマジな）不安に襲われる。何度刈っても生えてくる草たちと格闘した経験があるので、この景色はいずれ再生すると信じられるのだが、その経験がなければ本当に落ち込んでしまっていたかもしれない。

これに乗っている以上、草や虫たちを愛でることはできないだろう。 悪意のあるなしに関わらず、触れただけで相手を壊してしまうような、ゴーレムのような。

石畳を踏みくだき　歩く

君にうまく触れないよ

僕の体大きすぎて　君を押しつぶすだろう

君のおうちを壊してしまってごめんね

（月の輪/七尾旅人）

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

＜ユンボについて＞

駐車場の掘り返し作業はその日のうちにほとんど終わってしまった。これは小型のユンボだが、じゅうぶんすぎるほど怪物だと思った。この何倍も大きな重機が土木の現場ではうようよ活動しているから恐ろしい。震災後の陸前高田で行われた、あの嵩上げ工事がいかにトチ狂った所業であるかがすこし想像できた。とはいえ、この破壊行為を引き受けてくれる人がいるから、街には道路が敷かれ、家や学校や病院や映画館や美術館が建てられ、自分がその恩恵を享受していることもわかってはいるのだけど、それにしても、ちょちょいと手先の操作でバケットを動かし、土やら、密集して塊みたいになった根っこやらをぐいっと掘り返す、という作業を繰り返して、ふとエンジンをとめて地上に降り、すくいそこねた土の塊を素手で持ち上げようとして、その重さに衝撃を受けるとき、あるいは石とか草の根っこも同様に、さっきまでほんの数センチのレバー操作で、これほど重たいものをあちこちに動かしていたのかという事実にぶち当たるとき、愕然としてしまう。私の手で操作しているのに、つまり原因は私の手にあるのに、それがもたらす結果が、もはや私の手を離れてしまっているのだ。気がついたらボコッと、深さ50センチの穴がそこにあいているのである。それも、ほんの数十秒のあいだに。操縦席は地面から数十センチの高さしかないはずなのに、ここに座ると地面がディスプレイ越しの世界みたいに現実味がなくなる。

現実味がないという表現はこの感じを言い当てているかもしれない。目の前のレバーを上下左右に傾ける操作と、その操作が現実の質量を持つ物体にもたらす作用の結びつきがヴァーチャルな感じ。まるでゲームをやっているような感覚で、何十キロもある石や土の塊を動かすことができてしまう。自転車とか金槌とか、服とか釣竿とか、人間は自分の体を拡張する道具をたくさん開発してきたが、このユンボという道具、あるいは油圧ポンプという技術は自動車に負けないくらいの革命だったのではないか。このパワーは明らかに一線を超えている。スコップからユンボへの移行は、水鉄砲の次にAK-47を扱うくらいの飛躍がある。くれぐれも扱いに注意しなければ、このパワーは私の精神にも作用してくるだろう。つまり、心までモンスターになってしまわないように気をつけなければいけない。

こわいのは、こうしてゲーム感覚で地面を掘ったりできるのが楽しいことである。この作業には快楽がある。『スターウォーズ』に「フォース」という概念が出てくるが、あれに近い。体を動かさずに遠くのものを動かしたり、重たいものを直には触れずに持ち上げたりする快楽。あるいは、対象を”ねじ伏せる”という根源的な快楽もあるのかもしれない。破壊欲求というか、こちらは傷つかずに相手をめちゃくちゃにできることの気持ちよさと言うか（あまり認めたくはないが）。加えて「大きなものを構築する」快楽もたぶんある。大きな穴を掘ったり、掘った土で高い山を作ったり（それも小一時間で）。私はやったことはないけど、ゲームの「マインクラフト」もこれに近い快楽があるのではないか。

なんにせよ、おそろしいおもちゃだと思う。感覚が麻痺しそうなので、あまり長期間は遊ばない方がいいかもしれない。

↑掘削工事の途中段階。駐車場を掘って出た残土は、のちに「勉強堂」の版築の材料となる予定

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

この日、以前も勉強堂に来てくれた友人のK氏が東京から再びやって来て、私がユンボと格闘しているあいだ、もくもくと作業をしてくれた。 駐車場の土留めに使う木の杭を切り、腐敗防止のペンキを塗ってもらった。

ここに二度来たのはK氏が初めてで、私としては嬉しいのだけど、この暑いのによく来てくれるなあと、ちょっと不思議に思っていた。K氏が雑談のなかで「なんか楽しいんですよね。ほんとは毎回来たいくらいです」と口にしたのを聞き、腑に落ちるものがあった。私にとって、これは自分のプロジェクトだから「楽しい」とか「楽しくない」とか以前の問題として「やる」というだけなので、「楽しさ」の側面を考えたことがなかった。そう言われて初めて、たしかにこれは楽しいことなのかもしれないと思った。しかもK氏は、人の仕事を手伝うことのなかにそれを見出している。すごいことだ。

＜K氏と行った、ムファ ハラールレストラン（第九号参照）にて＞

「ムファ ハラールレストラン」へ昼ごはんを食べに。以前の報告では触れなかったけれど、この店はけっこう揺れる。建物内を人が歩くたびに震度1～２くらいの揺れが起こる。さっきのユンボの話に繋がることだが、建物をつくるときはすこし揺れるくらいにしたほうがいいんじゃないかと、ここにくると思う。人には「重さ」があることを思い出させてくれるからである。誰かがそばを歩くだけで、他の人間がそれを感じることができる。普段意識しないが、実は私たちには「重さ」があり、歩けば建物が揺れるくらいの、それくらいの影響力が隠されているのだと実感できる。それは生きていることを証明するエネルギーであり、ほとんど命の肯定といっていい。人が歩いてる時も歩いてない時も同じように微動だにしない建物は、いわば人の存在を否定する。「お前など、いてもいなくても同じだ」そんなことを言われ続けたら、力がそがれてしまう。以前の報告書で「建物は車が通ったら揺れるくらいがちょうどいい、なぜならこの地盤が危ういものだということを思い出させてくれるから」というようなことを書いたが、車ではまだ甘いかもしれない。「人が歩いたら揺れる」くらいにしないとだめだ。特に、目指すべき行き先がわからなくなってしまったいまのような時代においては。いま、ここの重さを感じ、それを肯定すること。私が歩けば建物が揺れる。私が歩けば、その場のみなが揺れを感じる。よいことだと思う。

しかもこの「ムファハラールレストラン」の従業員（前回接客してくれた人と同じ）が着ている制服の袖には「ムファ」というつたないカタカナの刺繍がほどこされていて、かわいい。

渡されたメニューの中に「朝食メニュー」という紙があったので「これも注文して大丈夫なんですか？」と聞いてみたら、メニューの一部を指差し、「うーん、ここ大丈夫」といってから、一呼吸おいて、メニューの全てを指でなぞるように示し

て、「大丈夫！」と教えてくれた。私はそこに書いてあった「ギードーサ」という薄いナンみたいな食べ物を頼んだ。ものすごく美味しかったのだが、油分が非常に多かった。スリランカの人たちはこれを朝から食べているのか、タフだなあ。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

この日、駐車場エリア（2.7m×4mの面積）の掘削を終え、平らにならすところまでできた。あとは境界のブロックを壊すだけだが、すごい作業を1日でやってしまった。

松の湯

K氏を駅まで送り、夜は松の湯へ汗を流しに。また全身が泥みたいになっていた。番台のおじさんは相変わらず無愛想である。松の湯での話を報告書ではいろいろ書いてきたので、にぎやかなおじさんなのかと思ってる人もいるかもしれないが、基本的にはものすごく無愛想である。こんばんは、と挨拶したときも、お金を支払うときも、帰りにありがとうございます〜と出ていくときも、おじさんは一切の言葉を発しない。私より先に上がった人の「どうもー」という挨拶に対して「はいー」と返しているので、常連には声を出すのもやぶさかではないと考えているのかもしれないが（あるいは、私の発声が悪いのか？）。不思議なおじさんである。

今日は「体・不調の方入浴禁止」という新しい札が入口にかけられているのを発見した。また「入浴一時間以内厳守」と書かれた札を脱衣所で発見した（つくづく注文の多い風呂だ）。しかしそれ以外は3ヶ月前と全く同じ、窓にたてかけられたトタン板（いま気がついたが、あれは目隠しなのかもしれない）も、長い柄の付いたローラーも全く同じ位置、同じ向きで浴室内に置かれている。湯船に浸かっているときに耳に入ってくる、テレビの音量も同じだ。ここだけ時間が進んでいない。もしかしたら番台のおじさんも、もう何十年も同じ顔なのかもしれない。

サイゼリヤ

風呂帰りにサイゼリヤに寄って、と思って車を走らせていたら、巨大な宇宙船みたいに光り輝いている「2nd STREET」をバイパス沿いに発見して吸い込まれてしまった。リサイクルショップが好きで「セカスト」もよく行くのだけど、これほど光に満ちている店舗は初めて見た。ちょうど車の中でパソコンを開くための折りたたみ机がほしかったので、990円で木製の良さげなやつを買った。

サイゼリヤでペンネアラビアータとわかめのサラダを食べる。

わかめのサラダがメニュー写真と全然違って、「全然違うな」と声に出してしまった。

(←左がメニュー画像、右が出てきたサラダ)

食べ終わってから、今日のことをまとめておこうと思いパソコンを開いたのだが、

「ああ、とうがらしが入ってるやつでしょ？　俺なんでも知ってっかんね、沖縄のこと。いったことないけど」

という男の声に耳をとられてしまった。斜め向かいに座っている三人客のうち、ひとりが電話で話していて、「行ったことないけど」のところで他の二人がスプーンを口に運びながら「ははは」と笑っていた。”唐辛子が入

ってる沖縄のやつ”って、あのソーキそばにかける調味料のことだろうか、あれはなんという名前だったか、コーレなんとかグース、みたいな名前だったような…などと考えはじめてしまい、パソコン作業は諦めた。

コオロギ

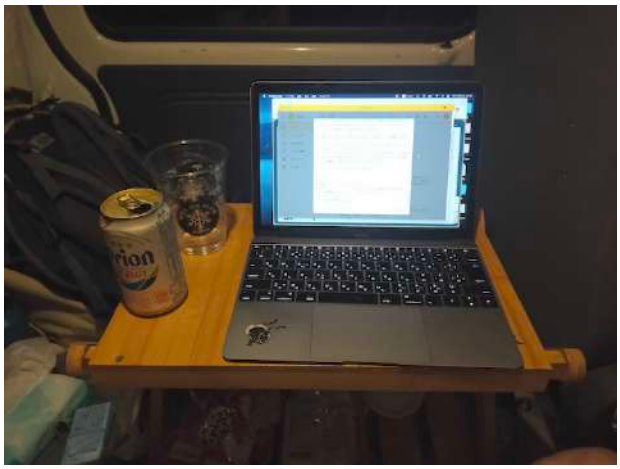
サイゼリヤの帰り道、ローソンに寄ってビールを買う。棚の下からコオロギの鳴き声が聞こえてきて、昨日の夜行ったセブンでも聞いたことを思い出した。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日



22時前には現場に戻ってきて、セカンドストリートで買った机を早速使って車内デスク環境を整えた。やる気がみなぎってくるのがありありとわかる。一気に滞在が楽しくなった。やはりこういう環境整備は大事だ。やる前はそれほど想像できないけれど、整ってみるとよくわかる。自分はこれを求めていたんだと。はやく勉強堂が日常の場所になるように整備したい。

ずっと窓を開けて作業していて、ふと「蚊がいない！」と気がつく。素晴らしい。ビールもおつまみも音楽もあるのに、蚊はいない。私は書いている。

携帯で描いた、版築の壁と木の構造を両立させるためのスケッチ

９月２０日（工事三日目）

七時半起床。ちょっと寝不足。セブンで買ってきたブリトー（モッツァレラとバジルのマルゲリータ）と、「ソルティライチ」の朝ごはん。鳩の鳴き声と五、六種類の虫の声。遠くに鳥の声もある。

現場の向かいにある畑が荒れ、雑草が茂っている。以前挨拶したここの持ち主は老夫婦で、月に数回週末に畑をやりに通っていると言っていたが、この様子だと数ヶ月は来ていない。すこし心配。

朝、Amazonで注文していたチャージコントローラー（CC）を受け取り、早速既存のものと交換してみた。が、うんともすんとも言わない。どうやらCCが故障したのではなく、逝かれてしまったのはバッテリーの方らしい。CCは１万１千円するので、速攻で返品手続きを行い、ヤマトの営業所に持っていった。

確認の為、ファントム（自分の軽バンの名前）の助手席の下を開けて、車のバッテリーを露出させ、そこにCCを繋げると無事に起動した。これではっきりした。次回来る時は、軽トラ用のバッテリー（40b19l）と、バッテリーとケーブルをつなげる金属部品とケーブルを買って持ってくる必要がある。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

発電所でこまごました作業をしているとき、滝口さんに声をかけられた。「いまは何をなさってるんですか？」と問われ、はっとした。奥さんに、重機が入ることを伝えていなかったのである。不安になるのも無理はない。

そもそも私は裏の滝口さんに、自分の計画について口頭で軽く話しただけで、ちゃんとした説明はしていない。その場で、御主人にはすでに話していた落ち葉の暖房のことを話し、いま掘っている穴はなんのためのもので、山盛りの土にも使い道があることを説明する。

「自分で全部やってすごいですね」

「はい、まあ、お金がないので…」

「学生さんではないんですよね」

「僕はアーティストというか。大学では建築を勉強したんですけど、人の家をつくるというよりは、こういう活動がしたくて、それを面白がる出版社の人なんかも現れてくれたりして、という活動をしています」

「なんか、分かる気がします。いまはそういう時代ですからね」

奥さんから携帯の電話番号を教えてもらい、こちらの番号も伝えた。

「家の電話は、最近は詐欺とか営業の電話ばかりで、ほとんど教えていないんです。なにかあればいつでも電話してください」

奥さんが家に帰ったあと、猛烈に反省した。重機を動かす前に挨拶をするという発想が全く思い浮かばなかった。最初は街中でやりたいとか言ってたプロジェクトなのに、近隣への挨拶もできないのか、と。

次に来るさいは、滝口さんに説明するためだけの計画書のようなものを作り、果物も持って挨拶に行こうと胸に誓った。

きつい１日だった。勉強堂の基礎用の穴（およそ2.7m四方）を掘る作業をしていたのだが、寝不足が災いしたのか、鼻が暴走機関車みたいに１日中暴れまくり、鼻水は止まらず、２,３分に一回はくしゃみが突然襲ってくる。以前報告書にも書いたことだが、私の鼻は体の疲れに対して異常に敏感なところがあり、ちょっとでも調子が悪いとこうして暴走を始め、日常生活を阻害してくる。16時すぎには体力の限界を迎え、作業をやめて風呂（クリーンセンター入浴施設）に行った。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

風呂に行く道中ですでに、焼肉を食べることに決めていて、近場で「焼肉」を検索し、風呂の帰りに「せいざえもん 別館」という焼肉店へ。

テーブル席に一人陣取り、クッパとホルモンとオイキムチを胃に入れたら、鼻はだいぶ大人しくなってくれた。まったく、わかりやすい鼻である。

19時42分にはもう車内で横になる。疲れた。小雨がときおり降るような1日だった。

９月２１日（工事四日目）

朝八時前からペンキ塗り作業を開始。K氏がやってくれた野地板へのペンキ塗りの続き。雨が溜まったシートに野地板が浸かってるような状態だったので、コンクリートブロックの上に垂木をのせその上に野地板を並べて乾かす。

乾かしている間、駐車場作業の続きを。

掘った穴の縁に沿って、K氏が作ってくれた塗装済みの木の杭を、掛矢（でっかい木のハンマー）を使っておよそ60cm間隔で打ち込む。打ち込んだら、（まだ微妙に乾いていない）塗装済みの野地板を土と杭の間に入れ、土留めとする。塗料は家で余っていた油性の「錆止め塗料（赤錆色）」を使った。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

土留め作業を終えたところ。問題はここからである。

ここに車を入れるには、境界のブロック塀を破壊する必要がある。

←これがなかなかやっかいで、最初は人力で2,3列ずつ壊そうとして、（このためにわざわざ買っておいた）コンクリート切断用のグラインダの刃でブロックとブロックの間に切れ目を入れ、掛矢で叩いてみたのだけど、びくともしなかった。

ブロック塀というものを壊したことがなかったので、これには驚いてしまった。五年ほど前に大阪北部で起きた地震の影響でブロック塀が倒壊し、小学生が犠牲になるという痛ましい事故があったが、ブロック塀というものは簡単に倒れてしまうという認識が私にも植え付けられていたようで、今回初めて破壊を試みて、その頑丈さに不意打ちを喰らった。この塀はしっかりと縦横に鉄筋が入っている、ちゃんとしたものだった。ちゃんとしているのは素晴らしいことだが、壊すとなると大変である。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

しかし幸いなことに、いまの私にはスーパーパワーがある。これは事前に考え

ていた方法ではなかったのだけど、ユンボに乗って適当にボコボコと攻撃を続けているうちに、「ボロっ」という感じでブロック塀は崩れた。

こいつがあまりにも楽々と持ち上げるので忘れてしまいがちだが、これはめちゃくちゃ重たい物体である。コンクリートブロックひとつだけでも14kgとかいうレベルなので、少なくとも300kg以上はあるだろう。

←なんとも暴力的なエナジーを感じさせる。
「みよ、この力っっっ！！」という感じだ。
この写真を村社くんに送ったところ
「これが解放された人の力…」
という返事が返ってきた

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

＜ブロック塀が倒れた瞬間のこと＞
　ユンボで地面をならしたとき、「取り返しのつかないことをやってしまったんじゃないか」と不安になったことはすでに書いたが、この塀が崩れた瞬間はそれがMAXで、思わず「うわ〜！」と叫んでしまった。
　アーティストのダミアン・ハースト（本物のサメやヒツジを切断し、ホルマリン漬けにした作品で有名）が、以前インタビューで
「サメを二つに切ったとき、自分はとんでもないことに手を出してしまったと思ったんだ。これはもう後には戻れないぞってね」

　みたいなことを言っていたのを思い出す。サメを真っ二つに切る行為と、高さ50cmのブロックを破壊するのとでは、「取り返しのつかなさ」は比べようもないし、比べるべきでもないけれど、自分の人生では初めての「土木工事」だったこともあり、塀が倒れる瞬間の光景はショッキングだった。
　わずか50cmの塀でもそう感じてしまうのは、私という個人が、私だけの責任のもとで、自分で行った作業だからである。仮に私が建設会社で働いている従業員だとして、会社の命令でブロック塀を壊したとしても、「とんでもないことをしてしまった」とは思わないだろう。では上司がそう思うのかといえば、上司としても設計者と施主の意向を受けて仕事を遂行しているだけなので、責任を感じることはない。では設計者や施主がそれを感じるのかというと、自分の手で作業を行うわけではないので、「うわあ、やっちゃったなあ」と感じるタイミングが存在しない。
　この「自分で手を動かすわけでもないのに、工事を命令できる」という立場が存在すること自体が、どこかゆがんでいるような気がしてならない。例えば行政の命令で街路樹の伐採が行われるとき、心に痛みを感じるのは、じっさいにチェーンソーを扱う現場の人間である。木を切るということがどういうことなのか、蜘蛛の巣を壊し、あるいは鳥の巣を落としながら枝を切り、木屑を全身に浴びながらチェーンソーで幹に切れ目を入れ、最後には倒す、という一連の「痛み」を、街路樹の伐採を

命令した人たちが経験することはない。それはどうなのか。「”そう”思うのなら、せめて自分でやってくれ」と思うのは私だけだろうか。

最初は草刈り機を使うのにもためらいがあったのに、人は痛みに鈍感になっていくらしい。私もこうして産業革命と油圧ポンプの力（ユンボ）を体の延長みたいに扱うことに慣れていって、いずれは戦場に兵士を派遣することにも慣れてしまうのかもしれない。自分ひとりの力、自分の手の届く範囲を超えた作業を、効率を求めて”やってしまう”こと。ここには注意を払うべき一線がある。そして、私はその一線を超えてしまった感がある。言うなれば、ファシズムへの一歩はここにあるのである。私はある意味で、ユンボという重機の力で地面を掘り、ブロック塀を破壊したことによって、ファシスト（あるいはナショナリストでもいい）に近づいてしまったと言える。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

こんなアナーキーな駐車場を作っているひとがナショナリストを名乗っていたら吹き出してしまうが、全体主義と土木工事には、個人の力を超えた対象をどうにかコントロールしようとしている点で、通じるものがある。

塀は割と綺麗に崩れてくれたので、後処理は楽だった。破壊したブロック塀は、ひとまず邪魔にならなそうな敷地の隅までユンボで運び、側溝に入ってしまったブロックのかけらも取り出し、その一部は塀の跡地にできた溝に、一部は土留めと土の間に入れ、16時前には作業を終えた。

クリーンセンター入浴施設で汗を流したあと（ロビーで「うちのワンちゃんなくなっちゃったの。9月7日に」「何歳？」「五歳」という会話を聞いて、「私の誕生日に愛犬が…」と思ったこと以外、特筆すべき出来事はなし）、東金の「くら寿司」に行ってみた。

驚いたのは、座席への案内もセルフサービスになっていたことだ。入口のタッチパネルで受付を済ませると、指定の番号のテーブルにいくように促される。席についても店員が来ることはなく、目の前のタッチパネルで注文すればレールに載った寿司が飛んでくるという仕組みである。案内も提供も自動化されている。調理も、シャリはすべて型抜きされたかのように同じ大きさと形なので、一部は自動化されているんだろう。

会計も、皿を数えるときだけは店員が来るが、その先はセルフサービスで、出口付近の自動精算機にお札を入れるとお釣りが返ってくる。

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

これだけ自動化されていながら、ひとつだけ最初から最後まで人間が行っている仕事がある。それが片付けである。片付けはなぜ自動化が難しいのか。極端な話、寿司職人はロボットが成り代わることができるが、片付けは人間にしかできない（同じことを以前も書いた気がするけど）。なんか間抜けな話だ。

なぜだろう。客が自由にできる平面が与えられてしまうから、というのが考えられる。

「レール上にいるのが寿司ではなく、客のほうだったら片付けも自動化できるか？」

などと考えながら、カウンター席で①つぶ貝②はまち③アサリの味噌汁④まぐろゆっけ⑤しめ鯖⑥カレイ⑦やりいかの順に食べた。おいしかった。

その後、コメダ珈琲店に行って電源席を確保し、カメラとパソコンとモバイルバッテリーを充電しつつ、今日の記録と、すこしだけ別の仕事をして。21時16分には現場に戻った。鼻水があまりひどくない、いい日だった。

９月２２日（工事五日目）

朝、セブンの駐車場に車を停めて納豆巻きの袋を開いていたら、昨日も見かけた高校生らしき少年が、昨日と同じく道路とコンビニの間のすきまスペースに自転車ですーっと入ってきて、昨日と同じような動作でスタンドを下ろし、カゴに入れてあったノースフェイスの黒いリュックの口を開けて財布を出し、リュックを背負って、昨日と同じく勢いのある歩みでコンビニに入っていった。昨日、私はこの少年の歩行に、まっすぐに前を見据え、自分の進むべき道を歩いてゆく、と言わんばかりの瑞々しいエナジーを感じ、まわりの様子を伺いながら行動するのではない、いわば”自分の時間”をもっている、こういう人間の方が人はついていきたくなるよなあ、と謎の感慨に耽ったのだった。納豆巻きを食べながら、そのことを思い出した。

ぜんぜん気にする必要はないのだが、覗いてはいけない他人のプライベートな習慣を垣間見てしまったようで申し訳なく、少年が私に気がつかなければいいなと思った瞬間、自分も、昨日と同じ場所に車を停めていることに気がついた。

少年はぱんぱんに膨らんだビニール袋を手に戻ってきて、昨日とは違うお茶を、昨日と同じくリュックのサイドポケットに入れ、颯爽と漕ぎ出していった。きっと学校に行くのだろう。

現場に戻り、ユンボの返却に備えてバケットやブレードから土を落としていると、ちょうど「千葉レンタル」の人が来た。先日と同じ兄ちゃんだった。青いツナギは胸元に「千葉レンタル」と刺繍があったので、制服のよ

うだ。

返却の書類にサインをする。借りた時と同じく、短い会話がある。

「これ一人でやってるんすか」

「はい」

「たいへんそうっすね」

「たまに手伝いがきてくれるんですけど」

「そうなんすか。まだしばらくかかりそうっすか？」

「そうっすね。まだしばらくは…もしかしたらまた、お世話になるかもしれないです」

「はい、大丈夫です。そのときはまた、電話貰えれば」

「ありがとうございました」

「はい、ありがとうございます」

《村上勉強堂》計画に関する報告書**No.9**

土木作業

作成者：村上 慧

2023年10月16日

ユンボを返却したあと、駐車場と同じように、勉強堂本堂の穴の土留め作業。一日かかるかと思ったが、昼過ぎには終わった。

駐車場のほうに砂利を敷いてから帰ろうかとも思ったが、もう気力も手元の現金もなかったので、ひとまずブルーシートを敷いて今回は作業を終えることにした。
←奥に見える青い山はユンボが作り出した残土で、今後版築の材料にしていく。

最後に滝口さんに挨拶。奥さんが「猫がいるもんで！」とバタバタと出てきてくれる。
「ご苦労様でした。天気もねえ…」
「でも、土砂降りみたいなことがなかったので」
「ああ、気温も少し涼しくなってねえ」
「ほんとにありがとうございました」
「なによりです」

《村上勉強堂》計画に関する報告書No.9

土木作業

作成者：村上慧

2023年10月16日

今回、バッテリーの故障は痛手だったが、それがきっかけで滝口さんとの距離が縮まったような気もする。次回来た時に訪ねる口実もできてよかった。

次回の目標

本報告書を書き始めてからもう３日経っている。ぼちぼち執筆の気力もなくなってきたので、今回は以上とする。
次回は駐車場を完成させつつ、ぼちぼち勉強堂本堂の骨組み工事に入っていきたい。それが終わったら、版築の作業が待っている。
非常に遅々とした歩みではあるが、勉強堂の工事は着実に進んでいる、と自分に言い聞かせながら、引き続きやっていく。